

# 平城宮跡昭和39年発掘調査概要



奈良国立文化財研究所

平成宮跡昭和39年発掘調査概要

目次

1. 朱雀門付近の調査 ..... 1  
2. 才2次内裏北側区域の調査 ..... 2  
3. 才2次内裏北側区域の調査 ..... 2

付 図

1. 平城宮跡全図  
2. 朱雀門付近発掘調査(才16・17区)立掲出透図  
3. 才2次内裏北側たたら櫓跡(才10・13・19・20区)立掲出透図  
4. 平城宮跡南隅(才15区)立掲出透図  
5. " 物生式(才14次下井)立掲出透図  
6. 玉手門付近(才15区)立掲出透図  
7. " 先部丸城(才18区)立掲出透図

表紙カット

才14次発掘出土の草人拂

## 平城宮跡昭和39年発掘調査概要

特別史跡「平城宮跡」の逐段調査として、奈良國立文化財研究所は、昭和38年春の第13次発掘調査以来第20次の7回の発掘調査をみこむ。その各次調査の調査地名、発掘面積・堀塁期間は次表の通りである。

発掘回数	調査地名	面積	堀塁期間
14	宮城門南側付近	57.7m <sup>2</sup>	昭和38年4月3日～ ・39.3.31～
15	有岐西端、西面西端(五重門付近)	37.~	・39.2.21～ 3.31～
16	宮城門西中央、朱雀門付近	36.~	・39.2.10～
17	宮城指揮中央、第16次発掘北側北側 宮城西端、北壁余良鐵南側	59.4.~	・39.2.26～
18	第2次内裏東側	25.~	・39.4.1～
19	—承西り北側、第2次内裏北側	91.~	・39.4.1～
20	—承西り北側、第2次内裏北側	34.~	・39.5.15～

ここでは、昭和39年に実施した調査のうち、朱雀門付近を発掘した第16次・17次と第2次内裏周辺を発掘した第19次・20次の発掘調査について、その概要を報告する。

### 1. 朱雀門付近の調査(第16・17次)

第16・17次の調査区域から、朱雀門、東西西端門とこれに連なる築地のほか、毎2条、掘立柱列2条、溝などと被出した。

朱雀門は帝都北城の中央部南端で発見されたが、門の南半部は史跡指定地外の道路と池堤の下になり確認不可能である。基壇上面はほとんど削平され、基壇の周囲も縦横に走られた跡のため破壊されていたが、掘込みの基壇北側と、門の棟通と北側柱通の2列の礎石

下部圓め石の基在に上り斜面を施すこと少で造れ。基壇の大きさは東西約3.2m、推定した勅光約1.7mである。門の平面は横行5間（約25.3m）、縦行2塁（約10.9m）で、坡高は約3m（天平尺17尺）の等高である。登ね、朱雀門最落は寺の基底周囲の設備および階段に疊移していきむ。

朱雀門の東面で門に似り行く築地を検出した。東丸本陣の基底幅約2.7mで、北側は幅約3mの大走りと幅約3.0cmの溝があるが、南半部は基路下のため確認できぬ。溝は東の内側とも、東は朱雀門の高の中點線から東方約2.2mで、西口同じく中點線の西方約3.0mでそれぞれ北へ折れ曲がり、朱雀門に向達しない。

朱雀門の南北中點線より約2.9m離れた対称の位置で築地にあげらむと馬頭を更に検出した。飛門は東西とも東丸の中心線とに立てられ、2本の馬頭柱（柱間約4.3m）からなる。東馬頭柱に馬頭柱に接して北側に土塁40cm幅の護灰岩切石を組み置かれ、西馬頭柱では同様の位置に毛石を敷き並べられている。これらは馬の設備に關連したものと考えられる。

東陽門の北方約1.6mで、東西にならぶ馬頭柱の間（柱間約2.7m）と溝を検出した。またこれと対応する西陽門北方でも東西溝を検したが、特は発見されていない。

朱雀門北で東面約2.3mにわたり、上面に小石を積み始めた緑色土の盛土がある。この盛土は、調査地城の中央部以北では削子されており追跡できないが、朱雀門内の通路を示す遺構と推定される。調査地城の北界では、この盛土面の東端両端のほぼ北端長にあたる位置に2列の南北溝がある。これらの溝は道路の排水としての役割もあったかと考えられるが、2つの溝の構造に差違があるため判断はできない。

その他、朱雀門基壇上の北側に角柱を使用した東西方向の馬頭柱（柱間約3m）が、朱雀門西北方に2個の馬頭柱（柱間約3.2m）があるが、いずれも遺構の皇後關係から、朱雀門廃絶後の遺構と判明した。

## 2. 才2次内裏東側地域の調査(才19次)

一条通り南側の才19次調査地城のうち、現在までに発掘を終了したのは、才2次内裏内部の築地回廊に発見した8.6アールである。

この地城から発見した主な遺構は、建物3棟・溝1条で、いずれも盛土面上で検出された。

溝は凝灰岩切石を並べ、施設地区の中央部を東西にはしり、~~1/30~~の勾配で東に下降している。底面幅約20cmで断面は逆台形を呈し、側面口切石の二段積みで一部にはさらに上に玉石がつまれている所もある。埋土からみて溝は2回の使用が考えられる。今回の調査では35.6mを検出しただけであるが、おそらく西は内裏内部に伸びる。東口1928年岸熊吉が一部を調査した玉石積の南北溝に達するものであろう。

建物は少なくとも2回にわたって改修されている。

— A期 — 凝灰岩溝の南に5間×2間東西棟(桁行10尺・梁間6.5尺)がある。凝灰岩溝北側の1間以上×4間の東西廊付き南北棟(桁行・梁間共に10尺)はその配置から考えて同期のものであろう。

— B期 — 凝灰岩溝南の4間以上×3間の西廊付き南北棟(桁行6尺・梁間8尺)は、左穴の切りあい關係からみて、A期の5間×2間東西棟より新しい。

## 3. 才2次内裏北側地域の調査(才20次)

才20次調査は才13次調査地城に隣接した東地区と、平城陵参道西側で才11次調査地城に隣接した西地区で実施した。

西地区での主な発見遺構は、建物4棟・橋1条・土塁1などであり、少なくとも2期以上にわたって改修されている。

— A期 — 才11次調査で橋と考えられていた柱穴は13間×2間の南北棟(桁行・梁間共に10尺)で、破石ももつ連続と判明し

た。また、オ 11 次調査の際、平成陵参道沿いで両端を検出した南北軸は、今回は 5 面分を検出し合計 23 間以上のものとなる。これでオ 2 次内裏北郭内を区画するものであろう。

—— B 期 —— 西寄りの 3 間 × 1 間南北棟（桁行・梁間共に 10 尺）は礎石を掘えた壇物で、礎石穴の切りあい關係からみて、13 間 × 2 間南北棟よりも新しい。

中央部の 3 間 × 2 間南北棟（桁行 6 尺・梁間 7 尺），その南の 5 間 × 3 間南北棟（桁行 7.5 尺・梁間 7 尺）は共に獨立卷連物であるが、明期は不明である。北側で検出した 1 並約 3.5 仇；幕さ 1.5 m の方形土塗も暗期が明らかでない。

これによって平安宮の蘭林坊の前趾的存続と考えられるオ 2 次内裏北郭地域の堀堀セ一応終了した。

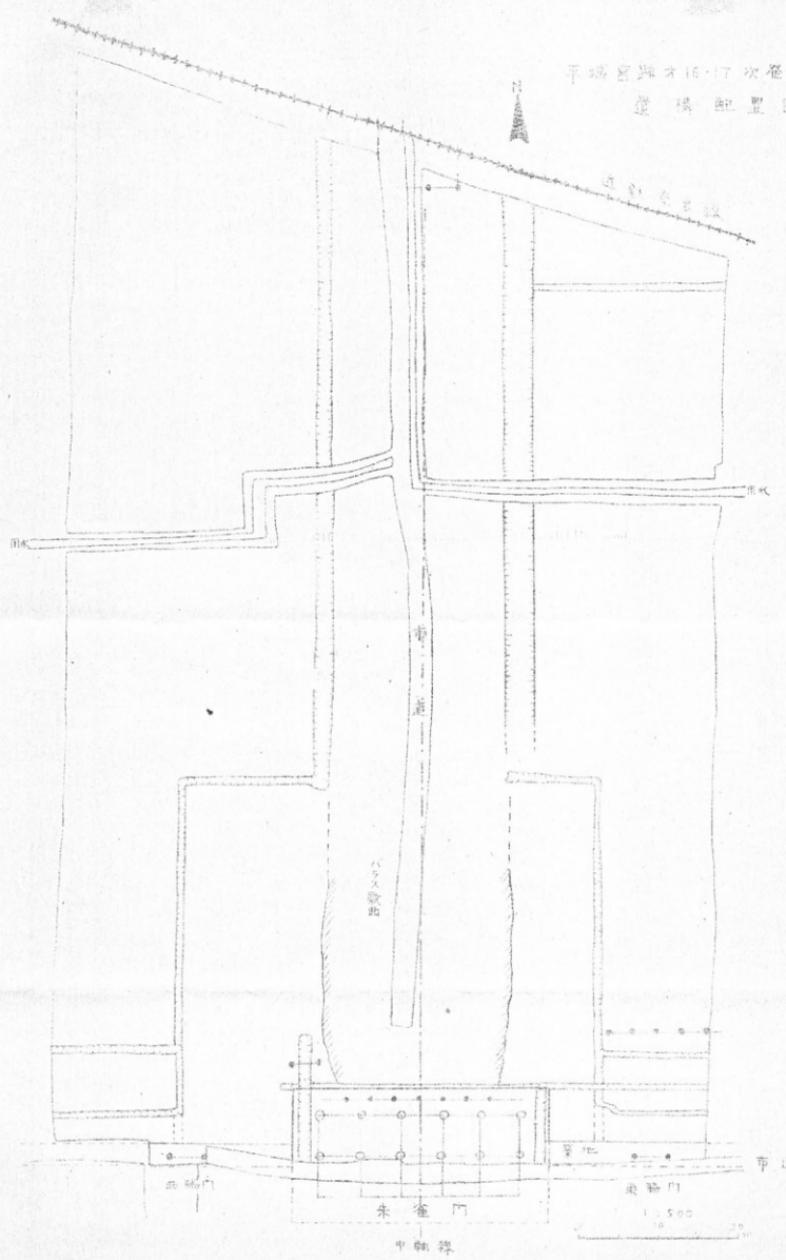
東地区では南寄りにオ 2 次内裏内部北側を限る築地回廊の北側柱列と、これに付随する酸灰岩づくり雨落溝、その北にある東西柱列、内裏北郭の南面棟丸など、前年度検査した遺構の東延長部が検出された。また、前査地域の北寄りを斜行する溝も、オ 13 次調査で検出されたものの東延長部である。この地域の中央部には大き凹みがあり、或は茹池かとも考えられる。

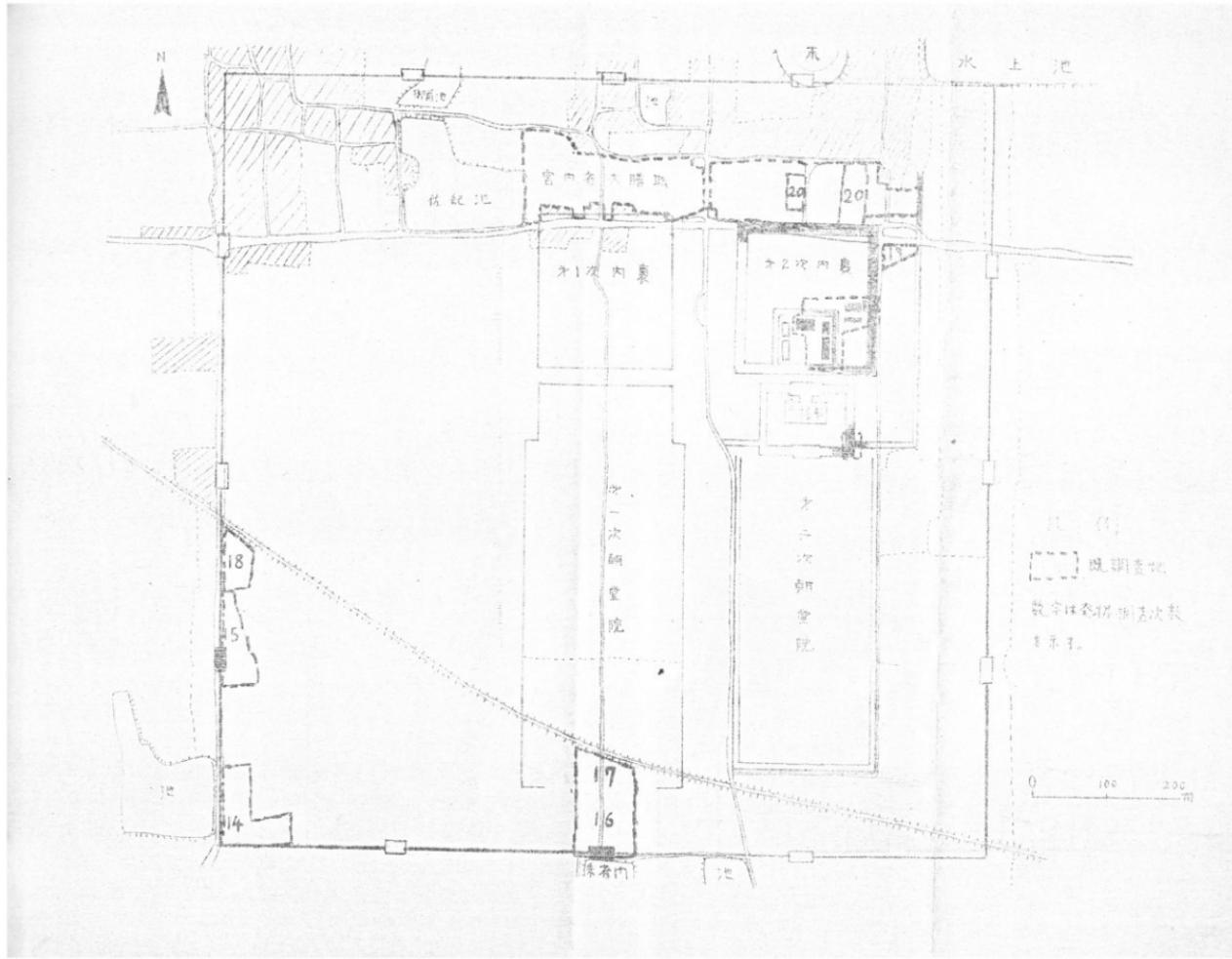
出土遺物としては瓦・土器など多數あるが、特記すべきものとして三形の亀瓦がある。

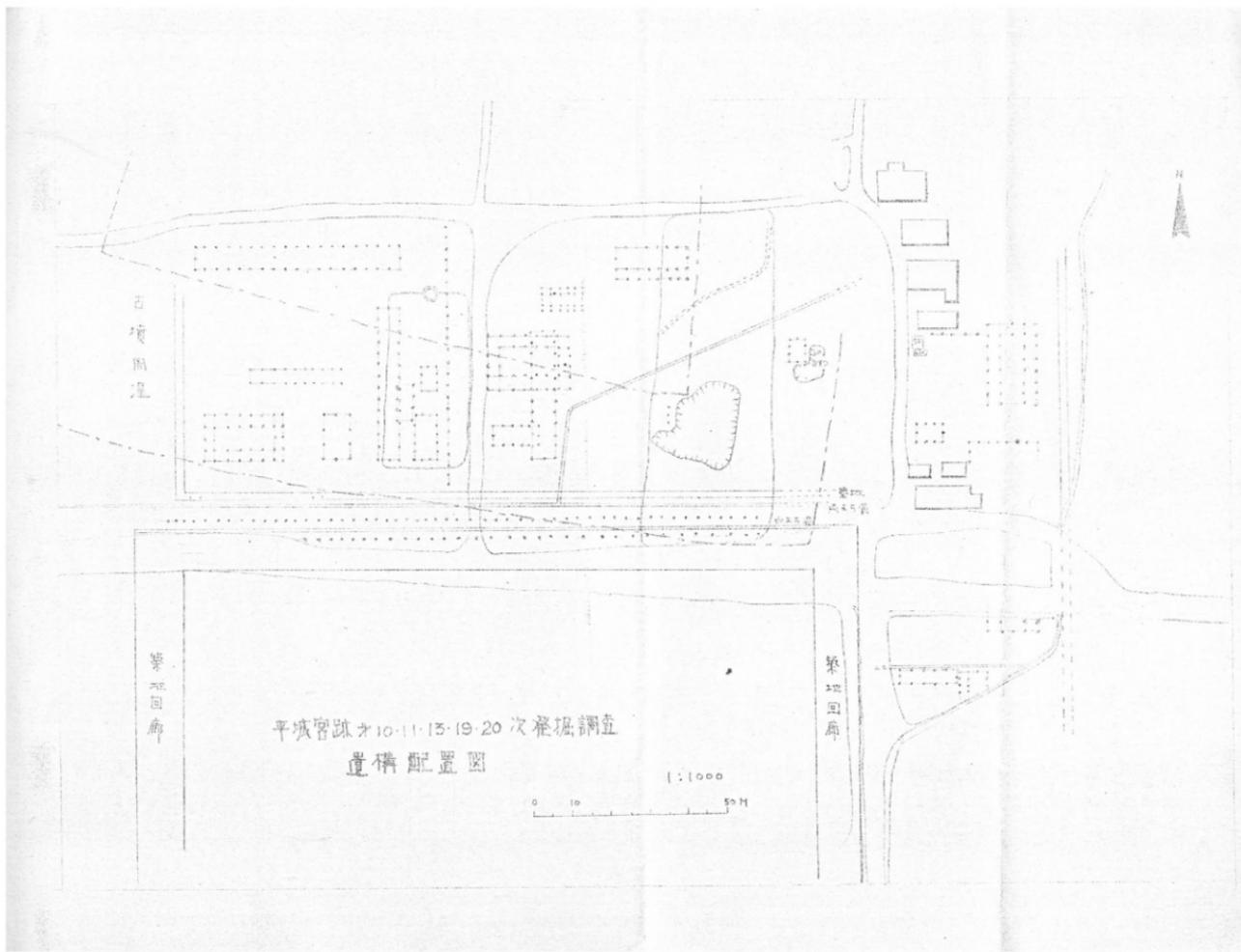
なお、東西両地区の大半は市庭古墳前方部をめぐる周邊部にあたるため、遺構は多く埋土上に構築されている。

平城宮跡第16・17次發掘調査

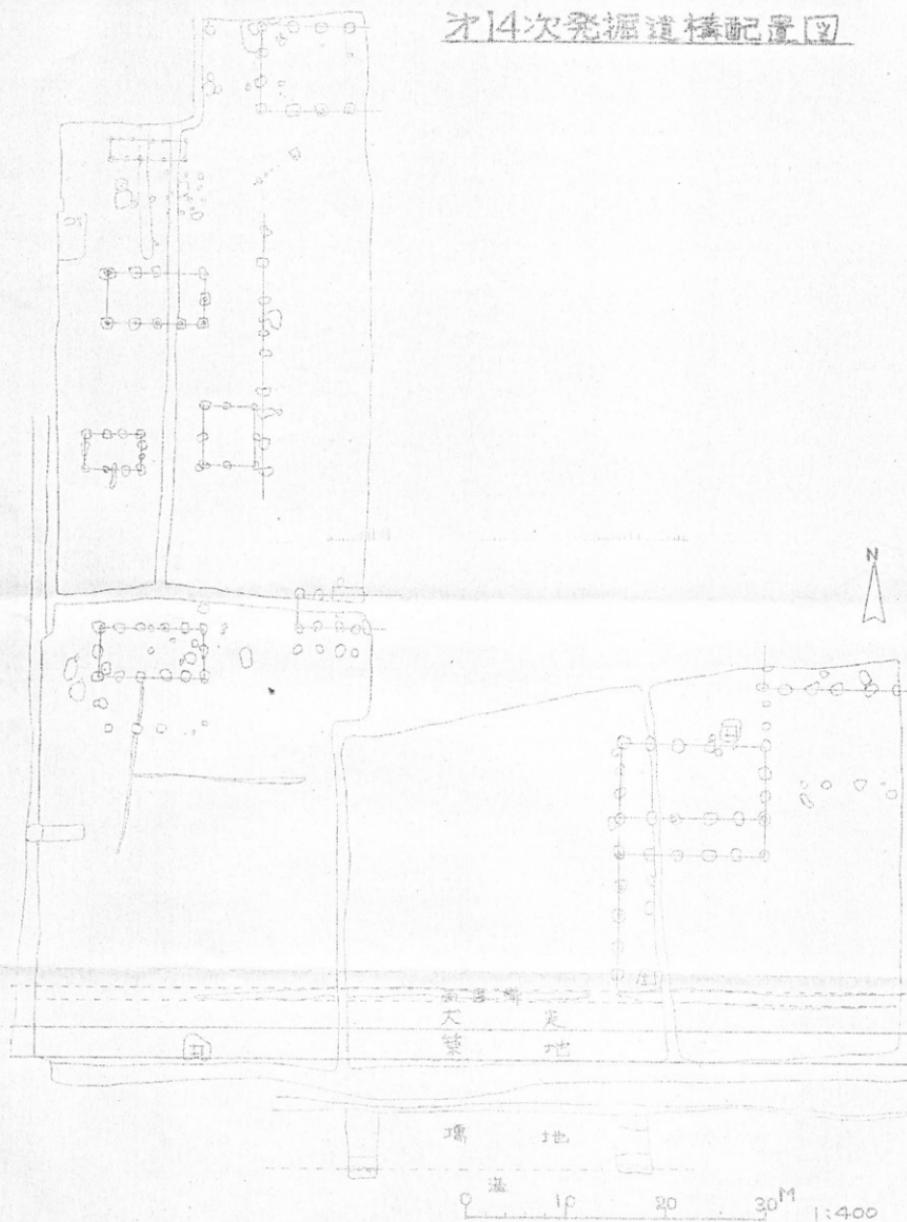
星置構圖







第14次発掘遺構配置図



## 第14次発掘下層遺構配置図

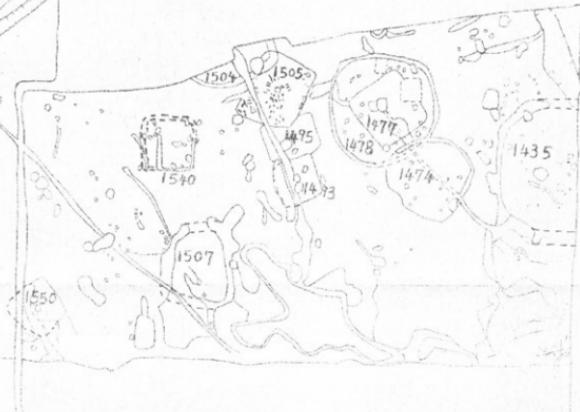


遺構番号			
	A	C	
1435	C	1504	C
1474	A	1508	B
1477	B	1507	C
1478	A	1540	B
1493	B	1550	B
1504			
1503			
1502			
1501			
1500			
1540			
1530			
1520			
1510			
1504			
1503			
1502			
1501			
1500			
1495			
1493			
1492			
1491			
1490			
1489			
1488			
1487			
1486			
1485			
1484			
1483			
1482			
1481			
1480			
1479			
1478			
1477			
1476			
1475			
1474			
1473			
1472			
1471			
1470			
1469			
1468			
1467			
1466			
1465			
1464			
1463			
1462			
1461			
1460			
1459			
1458			
1457			
1456			
1455			
1454			
1453			

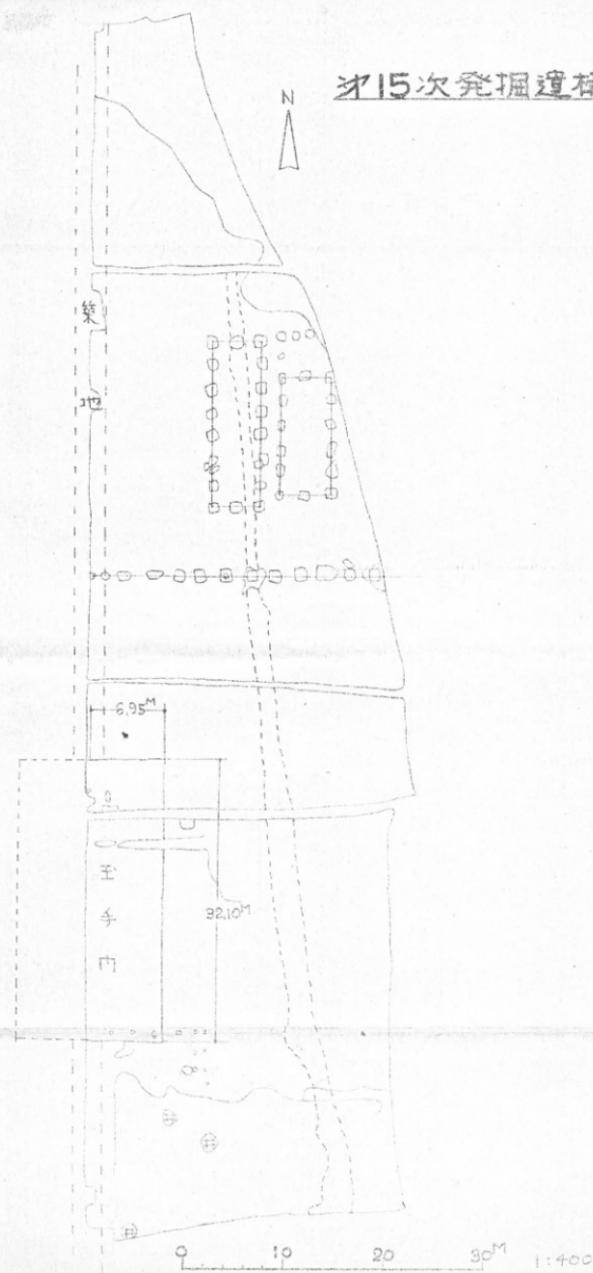
A: 円形住居跡

B: 方形住居跡

C: 周囲に溝をめぐらしている住居跡



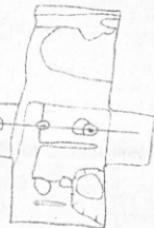
第15次発掘遺構配置図



第18次発掘遺構配図

N

PO



0 5 10 15M 1:200